

ボート競技経験と高校生のアサーションスキルとの関連性に関する研究

武田 健太 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 林 綾子

キーワード：アサーション ボート競技 青年期

1. 序論

今日、不登校やいじめなどが青年期において深刻な問題となっている。その背景の一つに、友人関係のつまづきがあげられる。この問題を解決するには、対人関係を円滑にする社会的スキルが重要であり、筆者は、社会的スキルの中でも特にアサーションスキルに着目した。

アサーションスキルは様々な定義がなされているが本研究においては、平木 (2008) によるアサーションの定義「自分の考え、欲求、気持ちなどを率直に、正直に、その場の状況にあった適切な方法で伝えることと同時に、相手も同じように発言することを奨励しようとする態度」を用いた。アサーションスキルとは、積極的な人との関わりの中から身につけていくことが期待されるが、筆者の場合は、中学・高校におけるボート競技の練習で仲間との積極的な関わりを通して身につけたと感じている。

そこで、本研究では、ボート競技経験と高校生のアサーションスキルとの関連性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

【対象】平成23年7月20日から8月中旬にかけて福井県のM高校の生徒141名(内ボート部員31名)を対象にアンケート調査を行った。

【調査用紙】

玉瀬ら (2001) が開発した「青年用アサーション尺度」2因子(関係形成因子、説得交渉因子)16項目に加え、筆者が独自に作成した記述項目を追加したアンケート用紙を使用した。

3. 結果と考察

1)ボート競技経験者と非経験者において、全体、因子別のアサーションスキル得点に有意な差はみられなかった(全体： $t(139) = 1.20, n.s.$ 、関係形成： $t(139) = 1.60, n.s.$ 、説得交渉： $t(139) = 0.28, n.s.$)。その要因として、ボート競技者には、競技を始めて数か月の学生も含まれていることや、ボート部以外の生徒も団体競技や集団活動を行うことによってスキルを向上していることが考えられる。

2)アサーションスキルと高校生の団体競技歴との関連性を調査した結果、団体競技歴と関係形成因子において有意な正の相関が見られ($r = .187, p < 0.05$)、団体競技歴が長い方が関係形成因子得点が高いことが分かった。団体競技を続けることで、より積極的に人と関わる機会が増え、関係形成能力が向上すると考えられる。説得交渉因子に関しては、有意な関連性が見られず、それは、一般論として関係形成が十分にできるようになってから説得交渉能力が習得されると考えられており、この段階まで至っていなかったことが考えられる。

3)アサーションスキルの性別による違いを調査した結果、説得交渉因子において女子より男子の方が有意に得点が高かった($t(139) = 3.17, p < .01$)。説得交渉は自ら積極的に自己表現をしないといけないことから、男子のほうが積極的に自己表現を行うことが考えられる。

4. まとめ

ボート競技において、より高い競技力を目指すにはアサーションスキルのような自己表現や自己主張を上手に行うためのスキルが重要である。ボート競技を通して、お互いの考えを適切に伝え合い、よりよいチームとなるため努力する中でアサーションスキルは獲得されるのではないかと考えられる。また、須田 (2011) の研究で運動有能感を高める運動経験のあり方が社会的スキル向上において有効であると述べているため、アサーションスキルの向上に関しても同様に経験の過程が重要であると考えられる。また、アサーションスキルが関係形成から説得交渉へ段階的に発達するものであるという理解はスポーツ指導や教育現場へ活用できると考えられる。

引用文献

- 1) 平木紀子 編 (2008) 「アサーション・トレーニング～自分も相手も大切に自己表現～」至文堂。
- 2) 須田和也 (2011), 大学生の社会的スキルとスポーツ経験および運動有能感に関する研究共栄大学研究論集第9号 pp. 37-53.
- 3) 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001) 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討奈良教育大学紀要第50巻第1号:pp. 25-30.